

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2013

課題番号：23242007

研究課題名(和文) 宗教研究の国際化推進のための拠点形成と総合的な研究史調査

研究課題名(英文) The Formulation of the Hub for the Promotion of Internationalization of Religious Studies and the General Research on the History of Religious Studies

研究代表者

渡辺 学 (Watanabe, Manabu)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：20192817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 35,700,000円、(間接経費) 10,710,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、アメリカなど4カ国の研究者を国際研究協力者として、神道概念の再検討、近代仏教の再検討、新宗教研究の再検討、諸宗教対話の再検討という4つの柱を立てて総合的な研究史調査を行うとともに、宗教研究の国際化推進のための拠点形成を行った。神道概念については英文資料集の出版を予定し、近代仏教に関しては、Modern Buddhism in Japan を出版した。新宗教研究に関しては、英文研究誌で特集号を組むとともに、画像のデータベースを構築して公開した。さらに、諸宗教対話の再検討に関しては、『キリスト教聖霊運動とシャーマニズム』の成果を日本語と英語の合本として出版した。

研究成果の概要(英文)：This project conducted research on the concepts of Shinto, Modern Buddhism, the new religious movements, and interreligious dialogue mainly in Japan, as well as the history of religious studies in general. Central to our approach was the formulation of a hub of international research collaborators from U. S. A., New Zealand, U. K., and Norway. Currently, we are preparing an anthology in English on the various concepts of Shinto, which will follow our publication of a volume entitled Modern Buddhism in Japan. In addition, we have edited a special issue on new religious movements in Japan for the Japanese Journal of Religious Studies and have created a database of images related to Japanese religions for the web. We have also published the book Pentecostalism and Shamanism in Asia in both English and Japanese.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学 神道 仏教 近代 諸宗教 対話 日本 哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 宗教研究は、他の学問と同じく欧米の影響の下に成立し、同時に明治政府の施策と不可分であった。たとえば、姉崎正治の『宗教概論』(明治33年刊行、『姉崎正治著作集』第6巻、国書刊行会、1982年)の第四部は「宗教病理学」であり、宗教を病理的なものとみる視点は、国家に宗教を管理する理由を与えた。とりわけ「神道」概念は、近代日本において、アサドのいう「編成原理」として働き(Asad, T., *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*, Stanford University Press, 2003.)。明治政府は正統を體現する国家神道と異端とを明確に識別した。一方で国体を體現する神道をいかに定義するかという問題が生じ、他方で、正統の枠内に収まるとされた教派神道と、それから外れた「淫祠邪教」と呼ばれた新宗教が生じた。新宗教研究では、社会的変動と新宗教の成立の関係が注目され、幕末維新时期以降、さまざまな新宗教が研究対象となってきた。

1995年のオウム真理教事件以降、また、2001年の9.11事件以降、宗教に対する社会の見方はさらに大きく変化した。宗教はそれまで、伝統、秩序、儀礼、風習などの概念とともに論じられることが多かったが、これらの事件以降、狂信、テロリズム、破壊、恐怖などの概念とともに論じられることになった。日本では一時的に信仰率が減少したほどである。これらの事件は、宗教研究の意義を改めて問い直す重要な機会であった。しかしながら、日本の宗教学界は、むしろ沈黙を守ることを選択した。2005年に東京で開催された国際宗教学宗教学史会議(IAHR)においても、この点を十分に深めることはできなかった。一方、欧米では、2001年の9.11事件以降、宗教研究の必要性が新たに見直されている。それは、欧米社会がますます多民族化・多文化化しつつある中で、いかに社会の安定と統合を図るかという課題と、イスラムをはじめとする異文化理解が重要であり、その点で宗教研究が重要な貢献をするという認識があったためである。このような諸外国の宗教研究の実情を考え合わせるならば、日本の宗教研究がさまざまな社会的変動の中でいかなる研究をしてきたのかを、国際的な視点から検討することは、社会的にも喫緊の課題であるといえよう。

また、海外において日本の宗教に関する研究が盛んであるのに比べ、日本の宗教研究者が国際学会に与えている影響はあまりにも少ない。要するに日本の研究者は長年、「土着の情報提供者」(native informant)の立場に甘んじてきたといえる。ハリー・ハルトゥーニアン(シカゴ大学)の主張に典型的に現れているように、日本人による研究は日本のイデオロギーに染まっているので、顧慮するべきでないというのである。このような偏見にさらされてきた現状を打開するためにも、

やはり国際的な視点から日本の宗教研究を振り返り、その成果と意義を明らかにすること、また近代日本の宗教史に関する基本的な資料や研究成果を英語で出版して国際学界に問うことがどうしても必要である。さらに、国際的な学会においてそれらの価値と問題点を明らかにする作業と、海外の研究者にとって継続的な窓口であるような研究拠点の形成が必要である。

(2) 本研究は、150年に渡る日本の宗教研究について、関連諸学にも広く目を配った総合的な研究史調査を行う。宗教学のみならず、哲学、社会学、文化人類学(民族学)、民俗学、日本史、心理学等々の幅広い分野に渡って、広く文献を渉猟する必要がある。そのため、前述したように、本研究の柱として4つの研究テーマを設定している。以下に敷衍する。

A. 神道概念の再検討：欧米の宗教研究の分野では、近年、宗教概念を根本的に問い直す試みが多く行われている。日本でもその試みは始まっているが、明治期以降、もっとも重要な役割を担ってきた編成原理としての神道の概念がどのように成立し、神道がいかに語られてきたかということに関しては、一部の先駆的な取り組みを除いては、いまだ萌芽的な研究段階にある。それゆえ、さまざまな文献資料や研究を精査し、神道の定義を再検討することには大きな意義がある。

B. 「近代仏教」の再検討：明治維新以降、仏教にも大きな変化が見られ、幕藩仏教は近代仏教へと変化していった(吉田久一「近代仏教の形成」、『講座近代仏教』第1巻、法蔵館)。1950年代後半以降、吉田久一、柏原祐泉、池田英俊らによって開拓され、牽引されてきた近代仏教研究だが、2000年代以降、国内外の「宗教」概念批判研究を経て、「近代仏教」概念、さらには「仏教」概念自体の見直しが進んでいる。神道概念と同様に、近代仏教研究にも根本的な再検討が迫られている。またジェームズ・ケテラーやリチャード・ジャフィ等、海外の研究者による近代仏教の研究成果が公刊され、近代仏教研究への注目が高まっている。また欧米だけではなく、韓国や中国等、日本の近代仏教研究に取り組む東アジアの研究者も増えている。こうした海外の研究者の交流も、今後、重要となる。つまり、「近代仏教」は世界の諸地域に見られる仏教の変容・動向であり、こうした研究を本研究の中に位置づけることには、大きな意義がある。

C. 新宗教研究の再検討：新宗教研究では、社会的変動と新宗教の成立の関係が注目され、幕末維新时期以降、さまざまな新宗教が研究対象となってきた。社会的変動における宗教の変化と、それに対する研究のあり方をみることによって、近代日本の宗教研究の成果と意義を改めて浮き彫りにできると考えられる。そして、とりわけ、オウム真理教事件以降の日本の宗教研究と9.11事件以降の海

外の宗教研究を対比することによって、宗教研究に対する社会的要請のちがいや今日的な意義について問い直すことが可能になる。D. 諸宗教間対話の実践と再検討：1960年代の第二バチカン公会議以降、東西霊性交流や東西宗教交流学会などの営みが続けられている。半世紀を経過した現時点において、仏教とキリスト教の交流の意義や成果を再検討することが可能であるし、必要でもある。そのことによって、宗教間の対話や文明間の対話が平和構築に果たす意義が改めて明らかにされると考えられる。

(3) 本研究の独創性は、日本における宗教研究の総合的な研究史調査を、国際的な協力体制のもとに遂行し、その成果を公開することにより、単に研究のみならず、海外に開かれた継続的な窓口となる研究拠点を形成する点である。それを可能とする条件を本研究所は備えている。まず、本研究の主体となる南山宗教文化研究所は、長年にわたり、英文研究誌 *Japanese Journal of Religious Studies* (『日本宗教研究誌』、1974年創刊、現在第37巻)を発行している。本研究誌は、日本人による良質な日本宗教研究を海外に紹介するとともに、海外の重要な研究も積極的に掲載し、日本宗教に関する研究の振興に努めてきた。また、科研費による先研究「宗教学の国際化推進のための研究機関の改革と交流に関する国際比較研究」(基盤研究B 2003年度～2005年度)を行い、研究機関の在り方について、海外機関や研究者と議論と交流を重ねてきた。その成果の一部として、*Nanzan Guide to Japanese Religions* (『日本宗教へのガイド』Honolulu: University of Hawaii Press, 2005)を刊行している。さらに、本研究所では諸宗教研究講座を設け、海外の優れた研究者を一定期間客員研究所員として受け入れてきた実績がある。これらの成果を踏まえて、本研究の遂行によって、海外研究者とのさらなる研究交流と拡大に取り組み、日本の宗教研究の一層の国際化を推進し、海外に開かれた研究拠点を形成することは十分に可能である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、我が国の宗教研究を国際発信するために、海外に開かれた研究拠点を形成することである。すなわち、日本における宗教研究の総合的な研究史調査を行うことによって、海外研究者との研究交流と拡大に取り組み、日本の宗教研究の一層の国際化を推進し、海外に情報発信する研究拠点を形成することを目的にしている。4つの研究テーマを柱とした共同研究を、国際的な協力体制のもとに遂行し、その成果を公開することにより、この目的を達成する。

具体的には、以下の項目が挙げられる。

- (1) 研究成果の出版(英文・和文著作の刊行、英文研究誌特集号を編集)
- (2) 日本における宗教研究の基礎的資料のデ

## データベース化とその公開

(3) 国際学会および国内学会での発表

(4) 国際シンポジウムの日本での開催

以上のようなことなどによって、日本の宗教研究の国際的なプレゼンスを高め、かつ宗教研究を振興してゆく。

## 3. 研究の方法

本研究をテーマ毎に4グループに分けて遂行する。研究組織全体を研究代表者(渡辺)が統括し、研究分担者は各グループの研究・運営を主体的に推進する。海外研究者とは、日常的にインターネットを利用して交流するが、年に数回、南山宗教文化研究所(南山大学)に招聘し、意見や問題意識を交換する。また年に2回ほど全体会議を開いて、研究の進展具合を確認し、相互に問題点を指摘しあう。最終年度には、国際シンポジウムを公開の形で開催する。英文・和文の出版を目指し基本的資料のリストアップと翻訳作業を行う。RAを2名従事させ、リストアップされたもののデジタル化を進める。

本研究の遂行のために以下の人員による研究組織を立ち上げる(日本在住の外国人をカタカナ表記し、国際共同研究者をアルファベット表記する)。

氏名	役割分担・研究分野	所属組織・職名
渡辺 学	研究代表者・統括	南山大学・人文学部・教授
スワンソン, ポール	研究分担者・近代仏教	南山大学・人文学部・教授
ハイジック, ジェームズ	研究分担者・諸宗教対話(平成24年度末に任期満了)	
奥山倫明	研究分担者・神道概念	南山大学・人文学部・教授
ドーマン, ベンジャミン	研究分担者(平成24年度末まで)・新宗教	南山大学・外国語学部・准教授
金 承哲	研究分担者・諸宗教対話	金城学院大学・人間科学部・教授(平成24年度より南山大学・人文学部・教授)
林 淳	研究分担者・近代仏教	愛知学院大学・文学部・教授
大谷栄一	研究分担者・近代仏教	佛教大学・社会学部・准教授
マリンス, マーク(Mullins, Mark)	研究分担者・新宗教	上智大学・国際教養学部・教授(平成25年1月より国際教同研究者、オークランド大学・人文学部・教授(ニュージーランド))
Reader, Ian	国際共同研究者・新宗教	マンチェスター大学・日本研究・教授(イギリス)(平成25年度よりランカスター大学・人文社会学部・教授(イギリス))
MacWilliams, Mark	国際共同研究者・神道概念	セント・ローレンス大学・宗教学部・教授(アメリカ合衆国)
Baffelli, Erica	国際共同研究者・新宗教	オタゴ大学・宗教学部・講師(ニュージー

ランド)(平成25年度よりマンチェスター大学・人文言語文化研究科・上級講師(イギリス))

Lande, Aasulv 国際共同研究者・諸宗教対話  
ルント大学・宣教学部・名誉教授(スウェーデン/ノルウェー)

研究代表者(渡辺)は研究組織全体を統括するとともに専門とする領域の研究にも従事する。前述してきたように研究領域は大きく分けて4つある。

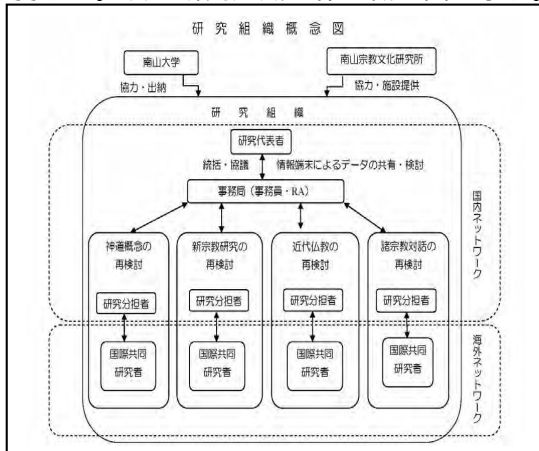
(1) 神道概念の再検討に関しては、奥山倫明とMark MacWilliamsが担当する。両者はすでに「神道概念の歴史性」に関する研究に着手している。

(2) 「近代仏教」の再検討に関しては、ポール・スワンソンと林淳と大谷栄一が担当する。

(3) 新宗教研究の再検討に関しては、ベンジャミン・ドーマン、マーク・マリンス、Ian Reader、Erica Baffelliが担当する。

(4) 諸宗教対話の実践と再検討に関しては、ハイジック、渡辺学、金承哲、Aasulv Landeが担当する。

今回の研究に関わる13名の研究者はきわめて国際的である。日本人4名、韓国人1名、アメリカ人4名、オーストラリア人1名、イギリス人1名、ノルウェイ人1名、イタリア人(ニュージーランド在住)1名からなっている。また、日本在住の外国人研究者2名を含み、海外からの多様な視点からの貢献を十分に期待することができる。この研究組織を円滑かつ効率的に運営するために研究代表者の所属する南山宗教文化研究所に本研究の事務局を設置する。このような多様な海外研究者と連携を取りつつ、大規模な研究史調査とその公開を期すために、外国語によるコミュニケーション能力を持つ事務担当者、専門分野の知識を持つ者による資料集成・デジタル化作業が必要となる。RA(リサーチ・アシスタント)2名とバイリンガルの事務員1名を南山大学において雇用し、研究分担者や国際共同研究者との緊密な連携やデータの集約作業に従事させる。渡辺がこれを監督・指揮する。渡辺がこれを監督・指揮する。この体制は研究期間が終了するまで維持する。次に研究組織全体の概念図を示す。



#### 4. 研究成果

本プロジェクトは、アメリカ、ニュージーランド、イギリス、ノルウェイなどの研究者を国際研究協力者とし、神道概念の再検討、近代仏教の再検討、新宗教研究の再検討、諸宗教対話の再検討という4つの柱を立てて総合的な研究史調査を行うとともに、宗教研究の国際化推進のための拠点形成を行った。

(1) 神道概念の再検討については、英文資料集の出版を予定している。明治期公文書・法令等における神社に関連する文書を収集するとともに、1.神道と近代日本の国民国家、2.初期日本学者による神道論、3.戦前知識人の神道論、4.神道と戦中の超国家主義、5.戦後の神道論、6.現代の神道論について英訳と編集作業を進めた。

(2) 近代仏教の再検討に関しては、Hayashi Makoto, Otani Eiichi, and Paul L. Swanson, eds., *Modern Buddhism in Japan* (Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014) を出版した。

近代仏教は一時期、注目されていなかったが、いまや再び脚光を浴びる分野となってきている。近代仏教とは、明治維新以降、欧米の影響や近代化の影響のもとでそれらに適応しようとして成立した日本仏教を指す言葉である。時期的には明治維新から第二次大戦の終戦までのものを指している。第二次大戦の前には、「明治仏教」に焦点が合わされていたが、大戦後には「明治仏教」から「近代仏教」へと焦点が変わるが、そこでの論点は「モダニズム」(近代主義)である。2000年以降になると、近代仏教の多様性へと論点が変わっていることが指摘できる。

英文論集には、ミック・デネカー「1870年代初期の日本の啓蒙運動に対する真宗門徒の貢献」、大谷栄一「明治期日本における新仏教と呼ばれる運動」、谷川穰「明治前期の教育・強化・仏教」、吉永進一「鈴木大拙とスウェーデンボルグ 歴史的背景」、ポール・スワンソン「高木顕明と仏教社会主義」、林淳「宗教学と宗教系大学」、ジェフ・シュローダー「獅子身中の虫 金子大栄と近代仏教における権威の問題」を収めている。

(3) 新宗教研究の再検討に関しては、*Japanese Journal of Religious Studies* (Aftermath: The Impact and Ramifications of the Aum Affair, Erica Baffelli and Ian Reader, guest editors, Vol. 39, No. 2, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2012) で特集号を組むとともに、画像のデータベースを構築して公開した。

オウム真理教は宗教としてよりも事件として扱われることが多いだけでなく、それだけ大きな反響をさまざまなレベルで及ぼした。新聞、雑誌、テレビなどのメディアだけでなく、映画やドキュメンタリーなどでも扱われ、さらには、小説やマンガの題材にもなった。また、オウム事件の恐怖は日本社会に

深く浸透することになった。しかしながら、2011年が「ポストオウム時代」を記したと考えられる。それは遠藤誠一の上告が退けられたことによってほとんどのオウム裁判が終結を向かえたからである。

1995年のオウム真理教事件以降、宗教は危険でありコントロールする必要があるものと一般に受け止められるようになったことが指摘できる。オウム事件以外にも靈感商法が社会問題化したこともあった。宗教法人法の改正問題があり、宗教の公益性が改めて問われるようになった。さらに、1999年には被害者救済法と団体規制法が施行された。2000年には法の華三法行の教祖らが詐欺罪で逮捕される事件が起きているのが指摘できる。

また、「マインド・コントロール」、「カルト」などの言語使用が日常化するとともに、カルト対策運動が興隆したことも挙げられる。そして、オウム問題が学界に与えた影響も少なくないと言えよう。

JJRS 特集号「余波 オウム事件の衝撃と効果」では、分派として生じた「ひかりの輪」(エリカ・バッフェツリ)、他の新宗教に対する影響(レヴィ・マクラフリン)、さらに、宗教法人法の改正に見られる政治的な余波(アクセル・クライン)、ナショナリズムの興隆(マーク・マリズ)、マンガに対する影響(ジョリロン・バカラ・トーマス)、学界に対する影響(ベンジャミン・ドーマン)、オウム事件とテロ対策(イアン・リーダー)などを扱った。

(4) 諸宗教対話の実践と再検討に関しては、ポール・スワンソン編『キリスト教聖霊運動とシャーマニズム』(南山宗教文化研究所、2013) / Paul L. Swanson, ed., *Pentecostalism and Shamanism in Asia* (2013) の成果を日本語と英語の合本として出版した。本書は、とりわけ東アジアのシャーマニズムとカリスマ運動の関連性に着目し、在日外国人教会の問題(ラファエル・ジョージ「トランスナショナルな悪魔被い

在日ブラジル人 ネオ・ペンテコスタリズムの霊的世界」、飯田剛史「在日コリアン社会における純福音教会と巫俗 普遍的基層宗教としてのシャーマニズム」、また、近隣諸国の問題(キム・アンドリュー・ユンギ「韓国のペンテコスト派 シャーマニズムと韓国キリスト教の再形成」、A・ゴヴォルノヴァ「ペンテコスト運動とシャーマニズムの問題 学際的分析の試み」、F・J・コロム「シャーマンとスーフィについて ある「呪術・宗教的」なイスラーム神秘主義者の経歴」)について考察した。基本的には、東アジアの基層文化としてのシャーマニズムが外来宗教としてのキリスト教などと習合する現象が現在においても顕著に見られることが明らかになった。

本書の出版以外でも諸宗教対話について研究を行い、日本におけるカトリックと禅の

対話の発端の研究や諸宗教対話における一神教的パラダイムの克服の問題に関する研究などを行い、それぞれ成果をあげた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

渡辺学、今日のスピリチュアリティの一面 カトリックと禅の邂逅をめぐる、人体科学、査読有、23巻1号、2014、41-49

大谷栄一、「プロテスタント仏教」概念を再考する、近代仏教、査読無、20号、2013、20-34

Kim, Seung Chul (金承哲), How could we get over the monotheistic paradigm for the interreligious dialogue?, *Journal of Interreligious Studies*, 査読無、Vol. 13, 2013, 20-33

Kim, Seung Chul (金承哲), 10 Theses on Decentering Theology: Asian Christian Theology in Dialogue with Religion and Science, 南山神学、査読有、36号、2013、1-27

林淳、普通教育と日本仏教の近代化、近代と仏教、査読無、19号、2012、93-104

Okuyama Michiaki, Civil Religion in Japan?, *Religious Studies in Japan*, 査読有、Vol. 1, 2012, 61-77,

<http://jpars.org/online/wp-content/uploads/2012/04/RSJ-1-OKUYAMA.pdf>

渡辺学、オウム真理教事件をめぐる省察 元幹部の手記を中心に、南山神学、査読有、35号、2012、1-29

Mullins, Mark, The Neo-Nationalist Response to the Aum Crisis: A Return of Civil Religion and Coercion in the Public Sphere?, *Japanese Journal of Religious Studies*, 査読有り、Vol. 39, No. 1, 2012, 99-125.

Dorman, Benjamin, Scholarly Reactions to the Aum and Waco Incidents, *Japanese Journal of Religious Studies*, 査読有り、Vol. 39, No. 1, 2012, 153-176.

大谷栄一、近代仏教史研究の現状と課題、近代仏教、査読無、2011、18号、7-26

Hayashi Makoto, Religious Studies in Japan: A Historical Perspective, *Pantheon*, 査読有、Vol. 6, No. 1, 2011, 4-14

Hayashi Makoto, Japanese Buddhism and its Modern Configuration: Introduction, *The Eastern Buddhist*, 査読無、Vol. 42, No. 1, 2011, 1-8

林淳、宗教的学知の形成 仏教学を例に、日本思想史学、査読無、43号、2011、5-12

〔学会発表〕(計 12 件)

Kim, Seung Chul (金承哲), How could we get over the monotheistic paradigm for the interreligious dialogue?, American Academy of Religion, 2013.11.25, Baltimore, U.S.A.

大谷栄一、明治仏教史における雑誌と結社、日本宗教学会第 72 回学術大会、2013.9.8、國學院大學

渡辺学、諸宗教対話と宗教的多重所属、日本宗教学会第 72 回学術大会、2013.9.8、國學院大學

大谷栄一、アジアにおける仏教とモダニティ、国際日本文化研究センター・シンポジウム「近代仏教 トランスナショナルな視点から」、2012.12.8、国際日本文化研究センター

Otani Eiichi, Nichiren, The Buddha, and Activism: The Buddhist Social Movement of Seno'o Giro, The International Conference: Buddhist Conceptions of Modernity and Temporality in Modern Japanese Buddhism, 2012.11.9, The USC Center for Japanese Religions and Culture, Los Angeles, U.S.A.

林淳、近代の修験道と修験道研究、第 33 回日本山岳修験学会、2012.9.9、天川村洞川中学校

Kim, Seung Chul (金承哲), A Theology of Pluralistic Pluralism: A Hua-yen Buddhist View, European Association for the Study of Religions, 2012.8.26、Stockholm, Sweden

大谷栄一、近現代日本における仏教者の社会参加 妹尾義郎の仏教社会運動の試み、「宗教と社会」学会第 20 回学術大会、2012.6.17、長崎国際大学

大谷栄一、「プロテスタント仏教」概念を再考する、第 20 回日本近代仏教史研究会研究大会、2012.5.12、青山学院大学

Heisig, James W., The Misplaced Immediacy of Buddhist-Christian Dialogue, International Conference on "Interreligious Dialogue and the Cultural Shaping of Religions," 2011.9.23, University of Leipzig, Leipzig, Germany

大谷栄一、近代日本仏教史研究における「アジア」と戦争、日本宗教学会第 70 回学術大会、2011.9.4、関西学院大学

Mullins, Mark, The Neo-nationalist Response to the Aum Crisis: A Return of Civil Religion and Coercion in the Public Sphere?, European Association of Japanese Studies 13<sup>th</sup> Annual Conference, 2011.8.27, Tallinn University, Tallinn, Estonia

Makoto Hayashi, Otani Eiichi, and Paul L. Swanson, eds., *Modern Buddhism in Japan*, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014, 230

P. L. スワンソン編『キリスト教聖霊運動とシャーマニズム』南山宗教文化研究所、2013、398 / Paul L. Swanson, ed., *Pentecostalism and Shamanism in Asia*, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2013, 169 (日本語版と英語版の合本)

大谷栄一、近代仏教という視座 戦争・アジア・社会主義、ペリかん社、2012、294

〔その他〕

ホームページ等

<http://nirc.nanzan-u.ac.jp/ja/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡辺 学 (WATANABE, Manabu)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：20192817

### (2) 研究分担者

スワンソン ポール (SWANSON, Paul)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：20229272

奥山 倫明 (OKUYAMA, Michiaki)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：30308928

金 承哲 (KIM, Seung Chul)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：40350962

大谷 栄一 (OTANI, Eiichi)

佛教大学・社会学部・准教授

研究者番号：70385962

林 淳 (HAYASHI, Makoto)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：90156456

ハイジック ジェームズ (HEISIG, James)

南山大学・人文学部・教授

平成 25 年 3 月まで (退職)

マリンス マーク (MULLINS, Mark)

上智大学・国際教養学部・教授

平成 25 年 3 月まで (海外転出)

ドーマン ベンジャミン (DORMAN, Benjamin)

南山大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80513605

平成 24 年 3 月まで

〔図書〕(計 3 件)